

E-32 家計費からみた長期不況下の食生活の実態

名寄女短大 ○津田美穂子

目的 戦後一貫して国民の栄養状態の向上がいわれてきたが昭和48年以降「国民栄養調査」において栄養摂取量の低下がみられ「家計調査」では食料費の実質減や伸び傾向、エンゲル係数の上昇がみられる。不況下の食生活の実態を家計費の支出構造の変化をみながらとらえてみる。

方法 全国と、特に食費支出の低い北海道について、食費支出、購入量、実質額をみた原数値は総理府「家計調査年報」「家計調査北海道版」による。

結果 全国、北海道とも昭和49年、50年をピークとして米、魚、肉、野菜とも消費する絶対量は減少に転じ、支出額も減少あるいは伸びていない(実質)。所得階層別に消費量格差は依然大きく特に乳製品、肉、果物に格差が著しい。このような所から食生活の対応は従来いわれてきたのとほぼちょうど逆の、食事の欧風化→主食重視型へ、魚ばなれ→魚選択へ、既席カンパ用野菜→根菜へという逆エッジ現象をみせている。長期化する不況の下での所得のひびきやみと生活不安の増大をいち早く反映して特に食生活の中では“不況対応型”の消費構造の形成がみられる。